

公開シンポジウム

「学生が授業を変えられる？」

日時：2000年11月16日(木) 18:00～20:00

場所：本学池袋キャンパス 7102教室

〈シンポジスト〉

安岡 高志氏

(東海大学理学部教授)

松尾 哲矢氏

(本学コミュニティ福祉学部助教授 全カリスports健康科学教育研究室)

尾形比呂和さん

(本学コミュニティ福祉学部3年次生)

橋本和哉子さん

(本学文学部教育学科2年次生 セントポールズキャンパス編集室)

〈司会者〉

佐々木一也氏

(本学文学部教授 全カリ研究開発・広報委員)

I はじめに

佐々木(司会) 皆さん、こんばんは。本日はお忙しいところ、また暗くなってそろそろ家に帰りたいなという時間にたくさん集まってくださいまして、ありがとうございます。今年度の全学共通カリキュラム運営センター主催のシンポジウムを始めたいと思います。

今年のテーマは「学生が授業を変えられる？」という疑問符のついたテーマになっております。全学共通カリキュラムは立教大学のなかではいろいろな意味で授業の改革、カリキュラムの改革に取り組んできました。取り組んではきたのですけれども、多くは先生方の思いをそこに写したものであったということがあります。しかし、大学

は教員、職員だけがつくっているものではなく、主役は学生の皆さんであるはずです。

かつて大学は教員と学生が共につくるものであった時代もあったかもしれませんが。現在では必ずしもそうっていないかもしれないですね。きょうはそういった意味で学生さんがどう大学の授業にかかわってくれるかということについて、皆さんと熱く語ってみたいと思います。きょうはこうしたことについてたいへん造詣の深い先生方をお招きしております。日ごろ考えていることを遠慮なくぶつけて実りある時間にしていただきたいと思います。

私、司会者の佐々木と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、開会ということで、全学共通カリキュラム運営センター部長、社会学部の庄司先生にご挨拶いただきます。

よろしく願いいたします。

庄司 皆さん、こんばんは。きょうはお忙しいなかお集まりくださいまして、ありがとうございます。全カリもいわゆる完成年度といたしますか、1サイクルを終わろうとしております。こういう時期に「学生が授業を変えられる？」というテーマですが、まさに学生による授業評価は時代の一つの重要なテーマであろうと思います。そういうテーマを掲げてこのような場を準備いたしました。

こういう形で準備にあたってくださった先生方や事務局の方にも御礼申し上げますが、何よりもこの領域での日本における第一人者と言って間違いのない、安岡先生に直接お会いいただきまして、先生の実践についても直々にお話が伺える。本当にこの上ない機会だと思って、たいへん楽しみにいたしておりました。先生、本当にありがとうございます。きょうは立教大学の教員のほかに学生の方々にもご参加いただいて、この場を本当に私たちのものにしていきたい。そういう意味で、きょうは本当に意味深い企画であると思っております。

全学共通カリキュラムは佐々木先生のお話にもありましたように、多くの教員の思いを込めて運営しているわけですが、そして、数々の魅力に満ちた科目があります。しかし、他方において極めて条件の悪い科目もあります。そういうものすべてを含めて、しかし、

やはり私たちはこれを本当の意味で変えていかなければならない。それを変えるのは、決して教員だけではない。大学がいくら頑張っても逆立ちしても変えることができない、その多くはやはり授業を聞く、単に聞き手であるだけでなく授業に参加し、授業をつくっていく学生の力であると私たちはだんだん考えるようになってきました。そういう意味で、きょうこの場でいろいろ多くのことが学べるであろうということをも本当に期待しております。

壇の上におられる方々にもよろしく願いたいと同時に、きょう参加して下さっている皆さんに、ぜひとも積極的に意見交換に参加していただきたいと思います。きょうはどうぞよろしく願いいたします。

佐々木 ありがとうございます。それでは、早速、シンポジウムに入らせていただきたいと思います。

まず最初にお話させていただきますのは、いま庄司先生からご紹介がありました東海大学理学部教授、安岡高志先生です。安岡先生は、東海大学で勉強をされて、ずっと東海大学で研究をお続けになっておられます。現在、理学部の化学科の教授でいらっしゃる、東海大学、特に理学部の授業改革の中心的な役割を長年務めてこられました、東海大学だけでなく、むしろ日本の大学の授業改革の中心的な役割をずっと務めてこられました。

安岡先生はいろいろなところで活躍

しておられますけれども、たとえば大学教育学会という学会があります。大学教育学会は、大学教育をどう改善し、あるいはどのような内容をつくっていくかということを研究している学会です。そうしたところで毎年、年に2回会を催しておりますが、ご自分の実践研究を精力的に発表しておられます。輪も大きく広がってまいりまして、先生の意を体した研究もたくさん出るようになってきております。きょうは安岡先生に、そもそも授業評価とはどういうことか、東海大学ではどのようにしてやってこられたかといったことについて、お話させていただきたいと思います。では、よろしく願いいたします。

II 問題提起

安岡 ご紹介いただきました東海大学の安岡でございます。あまりお褒めいただきますとやりにくいのですが、今まで経験いたしましたことをちょっと話をさせていただきたいと思います。

佐々木先生は確か哲学ですね。哲学の先生は何もないところでぺらぺらよくしゃべるなあと思って、いつも感心してお聞きしているのですが、私は佐々木先生とは違ひまして、理学部化学科なものですから、どんな教育を受けたかという、必ず証明したことを言え、何かが言いたければそこでものを取り出せ、分析した結果を示せと教育されたものですから、私は佐々木先

生のように何もないところで1時間も2時間もしゃべることはできないわけです。そこで、私が今まで集めましたデータを基に少ししゃべらせていただきたいと思います。

OHPを使わせていただきます。この間、大阪教育大学でメディアセンターの方と一緒に私、講演をさせていただいたのですが、その方は、現在のメディアの最先端にはこんなものがある、こんなものがある、これでもか、これでもかという最前線のお話をされました。そして最後に言ったことは何かというと、何もないチョークと黒板がいちばん教育効果がある、そうおっしゃったのが印象に残っております。

東海大学がやってきました教育改革とは、まず最初に1993年に卒業単位を124単位に統一いたしました。これは何も教育改革と言うほどのことではありません。日本の大学は文部省規程で124単位と決まっているわけですから、特別、東海大学が改革したわけではありません。では、何をしたかという、東海大学は13学部あるのですが、13学部がすべて上限を124単位にすると決めたんです。上乘せをしないということです。

ということは、学生に勉強させないことかどうかという、そうではありません。先生方はご存じかもしれません。学生さんはもしかしたらご存じないかもしれませんが、1単位とは、45時間勉強した方に単位を差し上げてくださいと大学の設置基準に書いてあり

ます。そうしますと、 $124 \times 45 = 5580$ 時間、4年間で勉強しなさいと書いてある。逆算して4年間で割り、春学期、秋学期で割り、各学期15週で割って、さらに6日で割ると、1日7.75時間勉強し続けて初めて124単位がとれるということなんです。立教大学がもし150単位とらせていけば、立教大学は単位を安売りしているということです。

したがいまして、東海大学は124単位以上上乗せをしないとは、単位の安売りをやめようと申し合わせたわけです。



安岡 高志氏

次に、同じく1993年にシラバスの導入を行いました。シラバスの導入とはいったい何かということ、授業要覧といえますか、授業計画書といえますか。今まで授業要覧だったものに、何月何日に何をすると記入して配っているものが多いですが、東海大学ではどのようなことが言われているか。教員の方に聞きますと、せっかく教員がシラバスを配っても学生が読まないと言われるんです。学生が悪いのか、教員が悪いのかということになるわけですが、配ったものを読まないと言うと、学生が悪そうに聞こえます。しかし、私から見れば、読まなくても受けられ

るような授業のほうはずっと問題だと思っています。

なぜかという、1単位について45時間勉強した者に単位を与えてくださいと書いてあるのですが、45時間のうち、講義であれば15時間から30時間を授業でやることができます。たとえば15時間講義でやるのであれば、あとの30時間は教室の外でやってください。

トータル45時間であればいいとあります。ところが、日本のほとんどの大学は1単位=45時間のうちの15時間しか授業でやりません。したがいまして、あとの30時間は教室の外でやらなければならない。シラバスはいったい何のためにあるかということ、その教室の外の30時間を勉強させるためにあるのです。

したがって、日本の大学はすべて単位制ですから、1単位について45時間勉強させるという目的がなければ、シラバスなど導入しても何の意味もないんです。そんなことはない。立教大学はさも大事そうに導入して、みんなに配っていますよと言いますが、それは気休めに過ぎないと私は思っております。

ですから、もし1単位について45時間の勉強をさせるという目的がなければ、これから言う Semester 制を導入しようが、シラバスを導入しようが、そんなものはあまり意味をなさない。単位制自体、どういうことかということ、45時間勉強させるために、手をかえ品をかえ学生さんを何とか勉強させると

ということでアメリカが開発した制度なわけです。何とか45時間勉強させるといことがなければ、いま日本の全大がやっている改革はほとんど意味がないということです。全目的は、1単位について45時間の勉強をさせるということです。

シラバスは、したがって、45時間のうちの15時間しか教室のなかで勉強しませんから、あとの30時間を勉強させるためにいろいろなコメント、各学生がやらなくてはいけない義務をまず書かなくてはいけない。そして、学生がどうすればいい成績がとれるかという道筋をきちんと書かなくてはいけない。授業の内容は、きちんと予習や復習をして勉強してこなければ単位がとれないような授業にしなくてはいけない。

ここがちょっと難しいところなんです。単位がとれないようなと言うと、すごく意地悪く聞こえるのですが、そのように内容の豊富な授業をしなくてはいけないということです。大多数の先生方が授業改善を心掛けていますが、授業に来た学生さんを退屈させない、学生さんを満足させるということを念頭に置いた授業改善をやっています。これをいくらやっても日本の全体の教育力はほとんど上がらない。

今までは日本の小・中、高は非常に教育力があつたと言われていましたが、その教育力もいまや世界で比べると全然ない。香港の学生や朝鮮の学生に比べて、日本の小・中・高生は半分しかいま勉強していない。だから、いま日

本はすべての教育課程において教育力を失っておりますから、これからせめて大学が教育力を取り戻すためには、1単位=45時間ということを目標にしないではいけません。

きょうは学生による授業評価の話ですから、あまりこんなことを言っていると時間がなくなりますが、 Semester 一制はどうか。立教は Semester 一制ですか。学部によりますか。春・秋を完結させる、春学期、秋学期で完結するものを Semester 一制と言っているわけですが、たとえば今までですと4単位だったものは、週に1回授業をやって1年間やると4単位だった。 Semester 一制にすると、半期で完結するわけですから、4単位を半期で終わるためには週に2回勉強しなくてははいけません。

週2回勉強するとどれぐらい効果があるか。どんな効果かという、たとえば集中の効果と言っております。今まで学生さんが10科目勉強していたのが、5科目勉強すればいいわけですから、多くのことを考えなくていいから、よく深く勉強できる。これが一つの集中の効果です。もう一つある集中の効果とは何かというと、たとえば中学校から大学まで10年ほど英語をやってもだらだらだらだらやっているから身につかないという説があるわけです。それを集中してやれば身につくということ、集中の効果と言っているのですが、本当にそんな効果があるのでしょうか。

私は全くゼロだと思います。なぜか

というと、今まで週に5回英語をやっている、高校で身につかなかった英語が、大学に来て週に2回やって何で身につくのですか。大学の教員にとっては、週1回だったものが週2回になるとかなり大きなことなのですが、新入生にとっては週5回が週2回になっても何の効果もない。

では、セメスター制とはいったいどういうことか。やはりこれもアメリカで単位制を機能させるために発達してきたものです。では何か。週2回やるというと、基本的に月・木、火・金、水・土と中2日空けて時間割が全部組まれるようになります。ではなぜ中2日空けて時間割を組むかというと、45時間の勉強のうちの教室の外の30時間を勉強しやすくように中2日空けてあるわけです。これがなければ、セメスター制を導入してもセメスター制の意味はほとんどありません。

日本では4単位のを春と秋に2単位ずつに分けている大学もあって、これをセメスターと言っている大学もあるのですが、そういうことをしても全く意味はないということです。すなわち、いまだいたいここでやっていることは、アメリカの単位制を導入したわけですから、その単位制の本当の意味がわかっていなければ、卒業単位を124単位にしても、シラバスを導入しても、セメスター制を導入しても意味はない。

さて、こういう状態のなかで学生による授業評価とは何かということにな

るのですが、これは消費者の満足を測るものとして発達したわけです。実際には、消費者の満足度を測るものとして学生による授業評価、すなわち提供するサービスがどれだけ行き届いているかどうかということで始まったものなのですが、いざこれを使ってみると、評価に使えそうだということで、検討が始まったわけです。

しかし、日本でも学生による授業評価を実施しようとする、当然、かなりの抵抗にあうわけです。これからいろいろな抵抗について少し話をさせていただきます。

これはアメリカのバークレーの例(図1)ですが、左の上の部分は、上から見て、先生から見ていい教員とと思った教員。横から見て、学生がいい教員であると思った教員。すなわち、この部分ですね。この部分の教員は、教員が評価しても、学生が評価してもいい教員であった。ここの部分は、教員が見てよくない。こちらは学生が見てよくない教員。教員と学生の評価が異

教員による選定 (1967)

		Best Teacher	Worst Teacher
学生による選定 (1967)	Best Teacher	37	8
	Worst Teacher	2	19

図1 学生と教員の選定によるBest Teacher, Worst Teacherの一致

なっている教員がいるわけですが、合っている教員に比べて、異なっている教員は非常に少ないということです。

これで重要なのはいったい何か。私はいつも化学をやっておりますので、必要なのは、大事なものは何かということ、今の最新で何をやっているかということですが、これはかなり古くて、1967年になっております。ということは、30年以上前ですね。アメリカでは30年前にこういう議論をしていたんです。学生による授業評価が教員評価の材料として利用できるかどうか。

もともとは消費者の満足度調査ということで出発した授業評価が、教員評価の材料として評価できるかどうかということが検討され、このような過程を経て、今から20年前から急に学生による授業評価が大学で大きなウェートを占めてきました。そして、日本はそれから30年遅れてそういうことをやっているというのが現状です。

私は今から16年前に授業評価を始めました。そのときは今とかなり状況が違っておりまして、授業評価を始めると「あなたは頭がおかしいのではないですか」と言われるような状況でした。そのとき、われわれは何とか学生による授業評価は信頼できるものだと証明したいと思いました。ここ(図2)に示したのは、当時始めた10項目ほどあった項目の5点法の和を横軸にとって、縦軸に総合評価をとって示してみたものです。そうすると、各小項目の和が

だいたい総合評価に比例している。ということは、学生さんは、単に思い付きではなしに、それぞれの項目をきちんと評価したうえでつけていると感じます。授業評価はかなり信頼できると実感したわけです。

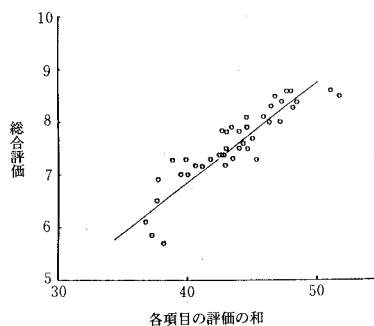


図2 各項目の評価の和と総合評価の関係

ところが、いくら私が実感しても、先生方はなかなか納得してくれません。いったいどういうことかということ、たとえば10点法で1点や2点をつける学生がいると、「学生は不真面目にもこんな点をつける、私のこのすばらしい授業に1点や2点をつけるとはいったいどういうことか、けしからん」と先生方はおっしゃるんですね。私は化学屋なものですから、それを何とか証明しなくてはいけないというわけです。

これは授業評価を始めて3年目か4年目でしたが、その年いちばんよかったのは、総合評価が10点法で8.6点でした。これをとるといちばん右側に山が寄って、評価の低いところはないわけです。いちばん低い点数は、その年は5.7点でしたけれども、評価が低くなる

に従って、1点、2点、3点をつける学生さんが多くなっております。先生方がおっしゃるように、もし1点、2点、3点をつける学生さんが不真面目だったとしても、これを見る限り、総合評価の低い科目ほど1点、2点、3点をつけた学生さんが多い。たとえ1点、2点、3点をつけた学生さんの評価が不真面目であったとしても、この授業は不真面目に回答してもいいと思わせるような授業であったということで、私はこの評価はやはり正しいと思っております。

いくら私がこんなことを言っても、授業評価に参加したくない先生は、納得しないんですね。したがって、これは私自身にとっては自己満足であったかもしれません。

東海大学では1993年にこれを始めまして、1996年に、あなたたちは授業評価に真面目に回答していますかと聞いております。そうすると、非常に真面目に回答している人とまあまあ真面目に回答している人を足すと89%、約9割の学生さんが真面目に回答しております。ということは、90%は信用していいし、10%はやはり不真面目に回答しているんですね。

でも、先生方の成績のつけ方のいい加減さに比べると、ずっと信用していいと思っております。平均点が30点だったりしてもほとんどの学生さんが単位を取ったり、試験だけ受けてもほとんどの学生さんが単位を取ったりするような成績のつけ方に比べて、

90%の学生さんが真面目に回答している授業評価は、かなり信用していいのではないかと私は思っております。

それでは、授業評価を制度化しなくてはいけない。きょうは「学生が授業を変えられるか？」というわけですが、制度化しなくてはいけないということをここで少し言ってみたく思います。

これは大学全体ではなくて教育研究所が授業評価を始めたときのデータ（図3）ですが、始めて5年目ぐらいのところですよ。小項目に他の教員との比較というのがあります。横軸に他の

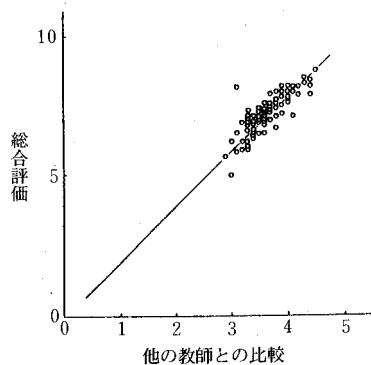


図3 他の教師との比較評価と総合評価の関係
教員との比較、縦軸に総合評価がとってありますので、かなり直線性がいい。ということは、学生さんは相対評価で評価をしているということがわかるわけです。

相対評価で評価をしているのはいいのですが、問題は何かというと、ふつう1点から5点までありますと、3点が普通の教員だろうと思います。ある

年に自主的に行ったとき、3点以上の教員が参加して、標準よりも低い教員はたまたまかかもしれません、1人も参加していなかった。したがって、先生方のボランティア精神、意欲に期待しても、大学はあまり変わらないと私は思っております。

学生さんが先生方にプレッシャーをかける必要があると思います。学生さんは出資者ですから、先生方に当然、いい授業をするように要求する権利があるわけです。そう言うと、学生さんもかなり真剣にならなくてははいけない。きょう実は午後1時から4時半まで、早稲田大学で大学の授業を考える会という会を学生さんの主催でやっておりました。早稲田大学の学生さんやそのほかいろいろな大学の学生さんが主催していたのですが、奥島総長に、学生さんが学生の署名を集めて授業評価をやってください、その結果を全部公表してくださいという要望を出したんです。

それに対して奥島総長は、私がここで答えられることは、その方向でできるだけ努力をするということだと言われた。かなり力強いことなのですが、そのときに奥島総長が言われたことは、この200人の教室が学生で一杯になっていないというのは、これはいったいどういうことか。教員にそういうことを要求すると同時に、学生さんもそれなりの覚悟をしなくてははいけないということだろうと思います。ですから、何もないところで先生方にただ期待を

しても、そんなに効果はないと私は思っております。

私どもの大学でやっております授業評価の結果で、いくつかの結果をお示しして、授業評価はこんなことがわかるということをお願いしたいと思います。(図4)

これを見ると、教授、助教授、専任講師、非常勤とあって、専任講師と非常勤講師が高いわけですから、大学は

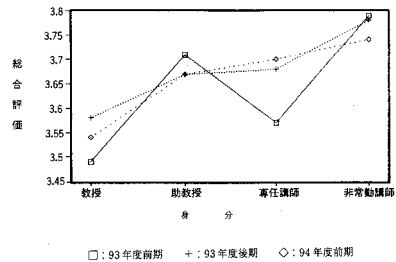


図4 教員身分別評価

これからは教授はやめて講師と非常勤で学校を経営すべきという結果になるわけですが、実際のところを言うと、非常勤講師というのは、東海大学では語学の先生方が非常に多くて、その語学の先生の評価が非常に高い。したがって、非常勤講師という部類でくくるとこういう結果になるのですが、語学のなかでの専任、非常勤、総合教育科目の専任、非常勤と比べると、あまり差がありませんので、この非常勤は除いていただいてもいいと思います。

問題は、教授がいちばん低くて、助教授、専任講師という順番になっているわけです。これはいったいどうしてか。

これは年齢別にとったものです。(図5) これを見ると、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代とだいたい10年ごとに0.1ポイントずつ下がっている結果があるわけです。ではなぜこういうことになったかですが、結論的に申し上げますと、どこからもプレッシャーがかからなくて、好きなことだけやっていたらよかったというのが、この結果を生み出したのだらうと私は思っております。

ただ、私も年をとっております。ただ年をとると評価が低いとだけ言っても、説得力に欠けるわけです。では、

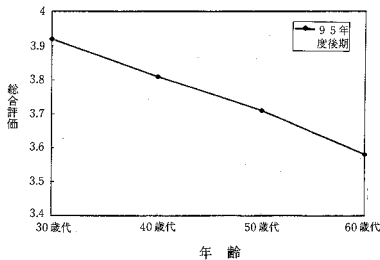


図5 教員年齢別評価

いったいどうして年をとると授業評価の結果が下がってくるか、調査してみました。(図6) 上が30歳代の教員の平均、下が60歳代の教員の平均ですが、それぞれの項目の差を示したものです。これを見ますと、話し方、板書の仕方、学生の参加というところでかなり差が大きいですね。したがって、この三つが年齢とともに評価が下がる原因ではないかと予測されるわけです。

そこで、私はまた学生さんに聞いてみました。それでは、総合評価に及ぼ

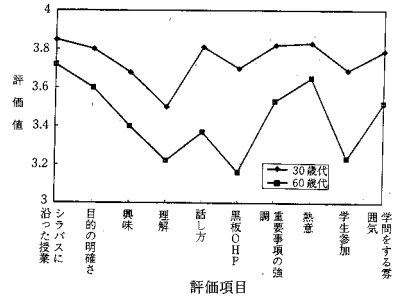


図6 30歳代と60歳代の各評価項目の結果の比較

す影響は、この三つのうちでどれがいちばん大きいですかということ、話し方がいちばん多くて、次に板書の仕方、授業への参加である。要するに、総合評価に及ぼす影響はこの順番である。さらに、それでは年齢によって差の大きいものはどうでしょうかと聞いてみると、話し方、板書の仕方、授業への参加ということになります。

ということは、従来ですと、ベテラン教員はいい教員であると思われたと私は思います。しかし、ここで見ると、ベテラン教員は必ずしもいい教員ではないわけです。私の経験では、ベテラン教員というのはだいたい3年ぐらいではないかと思います。3年間ぐらいは徐々に上達する。ところが、上達しても、あとはどんなに頑張ってみてもだれも褒めてくれないし、叱られることもないわけです。したがって、その後はのんびんだらりとやっていると、だいたい先ほどのように10年に対して1ポイント落ちるということになります。

それでは、授業をどうするか。この『授業をどうする!』という本は、カ

リフォルニア大学のバークレー校で先生方を学生さんが選挙で選んだ優秀教員に、研究所の研究員が、先生はどんな授業をやっていますかとインタビューしたものをもとめたものです。それをわれわれが翻訳したのですが、それを参考にする、たとえば話し方が悪いということになると、どうするか。この先生は「聖書」の朗読と組み合わせる。学生に話し方が悪いと指摘されると、教会に行って「聖書」を読むとき、授業のときの訓練を重ね合わせてやる。あるいは、この教員は演劇のクラスに入って発音の練習をしたと言っています。下の方は、家族で戯曲を読む。要するに、奥さんの前で明日の授業の準備をするということです。

このなかには先生方も何人かいらっしゃると思いますけれども、佐々木先生、奥さんの前でやっていますか。要するに、プロ意識があるかないかということが問題だろうと私は思っておりますけれども、それだけのプロ意識を持つかどうかということが今後は問われるのではないかと思います。

ちょっと年齢のことにこだわっておりますが、何で私が年齢のことにこだわるかという、私ももちろん年をとっているということがありますけれども、みんな年をとっていくからです。これを見ますと、年齢が高くなるにしたがって見られる傾向として、言葉として理解できない言葉がある、話し方が単調になる、同じことを繰り返すようになる。こんな傾向があるから気を



『授業をどうする! カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』
翻訳 香取草之助・安岡高志・他 東海大学出版会

つけてください。板書では、書く量が少な過ぎる、まとまりのない書き方をする傾向がある、早く消すということでもあります。そして、授業は知識の伝達手段であると思っている。学生に興味を示さなくなる。質問しにくい雰囲気が強くなる。

こういうことは非常にありますね。授業が終わりました。「はい、皆さん、質問はありませんか」と聞きます。口は「質問はありませんか」と言っても、足はもうドアのほうを向いて、目は質問するなよと言っているわけですから、現実はかなり違っているということでもあります。

理学部化学科の学生さんが私にくだった、年齢の高い教員への学生からの提言があります。学生の参加できる授業環境をつくれ。学生を見下すな。

愚痴をこぼすな。学生の変化に対応しろ。愚痴をこぼすなというのは、「いや、ぼくはここに来るような、君たちに教えるような者じゃないんだけどな」というようなことを言わないようにということですが、略字を使うな。テンポが悪い。脱線の話がおもしろくない（笑）。せっかく用意した話もシーンということがありますね。最後に、自分だけ納得するような授業をするな。私はかなり当たっているような気がします。

もう時間オーバーのような気がしますが、あと二つだけ言わせてください。授業ノートを2回書くという先生がいます。『授業をどうする!』という本にいくつか紹介されているのですが、ある先生は、授業の前の晩にもものすごく詳しい授業ノートを書く。そして、授業の朝、さらにそれをインデックスカード数枚にまとめる。そして授業には何も持たないで行く。これだけ予習をすると、学生さんはよく理解できると言っています。

東海大学で私、この話をしました。私から見るとこれは驚異的なことですから、こんな先生がいるんだってよと話をしましたら、私の前の主任の熊本先生が、私は30年間、全授業科目を毎年全部書き直しているとおっしゃいました。その先生は東海大学でいつも指折りの先生なんです。ということは、そうすればみんなよくなるわけではなしですけども、いい評価をとるためにはそれだけ努力をしているというこ

とであります。もう一つ、これは週末の教科書の読み直しということですから、似たようなことでしょう。

最後に、ここは学生さんが多いような気がするのですが、先生方も何人かいらっしやいますので、初めての事柄を学ぶ学生たちの立場を理解する、初めて学ぶことの困難さを忘れないでくださいという話をさせていただいて、終わりにしたいと思います。

それはいったいどういうことかという、授業を初めて持ったクラスでは、かなり授業がうまくいった。学生さんにいい授業をしようと思って、自分が深く理解しようと思った。理解するときにすごく理解が難しく、長く時間がかかった。そういう状態を体が覚えている状態で授業に臨んで学生さんたちに接すると、授業が実にうまくいった。

ところが、2年目はどうも授業がうまくいかなかった。なぜかなと考えてみると、2年目はもう自分は2回目ですから、ものごとを思い出す、理解することには何の不自由もなく、非常にやさしかった。したがって、自分の頭のなかの構造と学生さんの頭の構造が同じであると思って学生さんに接すると、うまくいかなかったと言っているわけです。

私のように30年も化学の授業をやっていると、自分の頭のなかの化学の構造と学生さんの頭の構造が同じだという錯覚に陥りますので、自分の言ったことを学生さんが理解しないと、何でもこんなことを理解しないんだとつい怒

りたくなるんです。したがって、私は、先生方も常に新しい、自分とは全く違う分野に挑戦されることをぜひお勧めしたい。

私はそういう意味で近ごろ社交ダンスをやっています。今まで全く一回も踊ったこともなければ、歌を一回も歌ったこともない者が社交ダンスをやっているんです。これが実に難しいんですね。何回見てもナチュラルターンであるということが認識できない。ところが、これも3ヵ月も見ていると、ちょっとわかったかなとなる。何年かやっているとちょっと踊れるかなと思うんです。ところが、ちょっと会場が変わったり、方向が変わったりすると、もう全く踊れない。

私はここで何を学んだかということ、学生さんにこんなことも理解できないのか、こんな応用もできないのかということ、最近は何も言う気になれない。ものごとが応用できるということは、どんなに深くものごとを理解していないとできないかということなんです。

私はダンスをプロになろうと思って始めたのですが、もうそれはあきらめました。元はとれなくて、ダンスのレッスン料はどぶに捨てているようなものですけれども、でも、大学の授業にはダンスはすごく役立っている。先生方もぜひ何か新しい、自分の全く不得意な分野に挑戦していただければ、かなり効果があるような気がします。時間がオーバーしてしましまして申し

訳ありません。以上です。(拍手)

佐々木 安岡先生、ありがとうございます。たいへん上手な授業だったと私には思えます。上手だなどというのは申し訳ないような評価ですけれども、またお話し残したこともたくさんおありでしょう。後の質問の時間に皆さん、たくさん、いろいろお話を聞き出してください。

では、次に、本学のコミュニティ福祉学部の松尾先生からお話しいただきたいと思います。松尾先生は、コミュニティ福祉学部でスポーツを中心に担当しておられます。松尾先生は立教にみえる前は福岡大学でスポーツ関係の授業をずっとお持ちだったのですが、立教へ来て全学共通カリキュラムが必修ではないということで、どう魅力的な授業をつくっていくか、ずいぶん腐心され、努力してこられています。その一環で、学生さんに授業の様子をアンケートしてみるなどということを立ててやっておられるわけです。そうした経験などについてもお話しただけだと思います。では、よろしくお願いたします。

松尾 皆さん、こんばんは。6時からという時間で遅いにもかかわらず駆けつけてくださりまして、どうもありがとうございます。いま大変おもしろく、また身につまされるようなお話があったわけですが、私は立教大学で実際に行った授業評価を中心に話しし

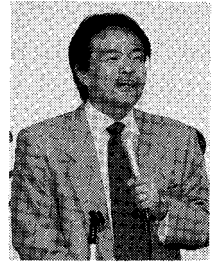
てみたいと思います。また今日の話は少しスポーツに偏ると思いますが、それをめぐって、学生さんが授業を評価すると言ったとき、本当は何を評価しているのかというところを少し深く見てみたいと思っております。よろしくをお願いします。

最初に、本気で授業評価をやらなければいけないという意識を持ったお話を若干させていただきます。

私が立教大学に来させていただいたのは、昨年の4月です。それまでは九州の日大と言われております、福岡大学に13年おりました。そこにはスポーツ科学部という専門学部があります。1学年300人ですから、1,200人の学生を相手に主に専門の授業をやってきたわけです。

そうしますと、授業に関しては必修が大半だったんですね。必修が大半ですから、学生に対して「単位は大丈夫？」という感じで、けっこう上からしゃべっても全然問題がないという状況でした。ところが、こちらに来させていただいて、全カリの担当教員ということでありました。しかもスポーツの場合は、大綱化の波に押されて選択になった。選択になりますと、変な授業をやっていると学生さんが来ない。ということは、スポーツ関係の先生は要らないのではないかという話に直結するわけです。これは大変だということで、いま皆さん一致団結して頑張っているところであるわけです。

お陰さまで、前期、池袋だけですが、



松尾 哲矢氏

1,298名の定員に対して2,921名、約2.3倍ぐらいの学生さんが来てくれております。そういう意味ではありがたいと思うわけですが、必修の場合は230コマぐらいやっていたところ、今はだいたい145コマぐらいだと思います。やはりやるなら、全員の要望に応えるためにも今の2倍ぐらいの授業数をやらせていただきたいわけですが、専任教員数はいちばん多いときで13名、今は何と6名という状況になって、おい、いよいよ大変だよ、しっかりやろうということになりました。

このままじっと待っているだけではダメなのではないか。本当にスポーツとか身体にかかわれるのはわれわれだけではないか。では、何がやれるかと話を進めたわけです。そのなかで、私たちは全カ리를機軸に動いておりますので、全カリの授業をまづもって充実させる以外にないのではないか。もちろんそれ以外に、学内外へのサービスとして、ウェルネス研究所というものを計画させていただいて、この研究所とあわせれば全カリのスポーツは大学への貢献がもっとできるのではないかということも視野に入れながらや

っているところであります。そういう意味においては、授業に多くの人に来てくれて、満足してくれるということが、どんなに重要なのか。

だから、ある意味で登録人数が気になって仕方がない。何人来てくれるか。初めの授業に行きまずでしょう。「皆さん、こんにちは」と言ったときに向こうのほうにいて、オーイ、前に来てくれみたいなときは、つまり少ない時は、いかなんかと思ってしまう自分がいたわけです。多くいてくださると、あー、よかった(笑)。これは私にはかつてない感覚でした。

魅力的な授業づくりの具体的な方策としましては今まではスポーツ実習だけでしたので、2単位科目をつくって、もっと充実させられないかということでこの授業を始めたわけです。スポーツスタディといいますが、この授業は、身体への気づきと解放、スポーツ文化の継承・発展、生涯におけるスポーツと生の時間的・空間的統合と生活化、体力の向上を含めた身体的適応を促す技術的・論理的理解と方法論の確立等を目的とした理論と実践の総合を目指した演習形式の授業です。ここに来ておられる先生方にもご協力いただいて、よし、認めましょう、少ない科目から始めましょうとなった。だから必死なんです。2単位科目を増やすことで、講義もし、演習のスタイルをとりながら、より良い授業を展開したい。それがダメだと言われると、これは大変だぞということになるわけですから、必

死です。

その結果を、皆さんから評価される前に、やはり自分たちで授業評価を試みよう。何がよくて、何が悪かったのか、しっかり見ないことには始まらないのではないかという話になりました。授業評価をさせていただいたわけです。

資料1(p.74)を見ていただきますと、これが実際に行った授業評価の内容です。授業評価の項目につきましては、安岡先生もいろいろな形で行われていましたが、かなり網羅的なものでした。1項目から28項目まで用意して、あとは自由記述で、これをどう改善したらいいか、スポーツスタディは2単位に値するかという直接的な項目も入れながら、聞いたわけです。

資料2(p.76)は28項目の内、スポーツスタディとスポーツ実習の間で評価に差異がみられたものを抽出して提示したものです。パーセントは、高い評価(5点、4点)を与えた学生の数値です。そうしますと、全体の約7割以上の学生さんたちは高い評価を与えていましたので、まあ何とか学生の皆さんは私たちの授業を評価してくださっているなと思ったわけです。

では、スポーツスタディとスポーツ実習はどう違うのかと見ると、スポーツスタディが高かった項目は、3番、6番、9番でしょうか。要するに、この授業を受けることで将来にわたって役立ち度と必要度などこれからやっていかなければいけないと理解してくれ

ていた。なおかつそういう習慣をつけようという意識を持っていた点で、スポーツスタディが生涯にわたるスポーツと運動の方法論の理解とその実践を大きな柱として開講されたことを考えますと開講目的は概ね達成されているとも思われます。

ところが、それ以外の項目を見ますと授業時の達成度や満足度などはむしろスポーツ実習が高い評価でした。この点についてはさらに詳細は検討を要します。

次にスポーツスタディは2単位に値すると思うかと直接聞いたものです。そうすると、全体のうちの95%が値すると評価してくれていました。

さて、スポーツスタディとスポーツ実習の評価に関して学生さんはいったいどういう視点で評価してくれているのだろうと思って、詳細に分析をし直してみました。それが資料3 (p.78)です。

全項目、28項目とりましたが、28番目の項目は総合点数です。ですから、27番までで因子分析、仲間分けをやってみたわけです。するとF1からF4まで軸があることがわかりました。

一つ目の軸は教員の態度。たとえば、教師のものごし・態度は適切でしたか。話し方、言葉づかいは適切でしたか。学生に対して公平でしたか。指導の仕方は適切でしたか。情熱的・意欲的でしたか。説明はわかりやすいものでしたか。このような項目から構成されています。

次は授業への態度・関心。この授業をできればまた受講してみたいと思えますか。意欲的に授業に参加できましたか。真剣に学ぼうと努力しましたかといったものです。

次に授業内容・教材・施設。施設・用具は満足できるものでしたか。この授業は将来役に立つと思いますか。授業内容として知的向上のバランスはとれていましたかといったものです。

最後に、この授業を通して仲間ができましたかといった、集団過程、コミュニケーションがどれだけとれているかという項目で成り立っておりました。

各因子の分布を見ますと、まずもって学生さんの評価ポイントは、授業を一つだけの視点ではなく、いろいろなバランスで見ているということが言えます。

次に、ではそれぞれにどのような相関があるか。特にここで注目したのは、総合評価との関係でした。総合評価はいったい何によって規定されているのだろうかということを見たかったので。そうすると、総合評価は全部の因子に絡んでいるのですが、総合評価がいちばん絡んでいたのは何とF1、つまり教員の態度でした。もちろんF1の教員の態度とF2の授業への態度・関心とあまり差がないとはいいいましても、いちばん高い回帰係数を持つのは教員の態度でした。換言すれば学生は、つまり、授業の内容のよさもさることながら、先生のプレゼンテーション能力、「いやあ、こんにちは」と言うよう

なフレンドリーな態度、あるいは「わかる？わからない人いるかな？」といった人柄、ものごしのやわらかさなどに強く規定されて評価をしている傾向があるということなんです。

とすれば、この授業評価を授業内容の良し悪しとして直接的に判断することができるかという問いが出てくることになるわけです。その意味で学生の授業評価については、学生はさまざまな視点で評価を行っていること、なかでも教員の態度、ものごし等を重視する項目にあり、評価結果を解釈するのにこれらの点に十分留意しておく必要があります。とはいえ、やはり教師のプレゼンテーション能力が、学生の一つの大きな評価ポイントになっていることは注目に値します。

プレゼンテーション能力に関しまして先ほど安岡先生はソーシャルダンスとおっしゃいましたが、私は落語だと思っておりまして、私は落語を欠かさず聞くようにしております。あのリズムが大好きです。ただ、これはあくまでも趣味の問題なのですが、プレゼンテーション能力にかかわる、非常に大事なポイントかもしれないと思っております。

これから大学教員に求められる能力には、研究能力、教育能力、社会貢献能力、学内サービス能力などあります。大学教員に聞いた大学教育観の調査では、大学の教員はどちらかといえば「研究者」だと思うに対して、73%の人がそのとおりだと言っています。この数

値が示すように大半の大学の教員は教育に対してよりも研究に対してプライオリティ、優先性を与えていらっしゃるような気がします。その点、やはり教育に対するプライオリティが低くなってしまいます。これが大きな問題になってくるわけです。

ですから、これからは教育能力のなかで、勝手にわかれということから、相手に伝わらなければ何も言ったことにならないという問題が出てくると思っています。しかし、そこで同時に抱えるのは、伝えたいこととニーズに応えることです。学生のニーズに応えればよい授業なのかという問いも、一方で出てきます。難しい。ニーズの掘り起こしがこれから非常に重要になってくるのではないかとも思います。

一方で、大学をよりいいものにするためにはどうするか。学生と教員がよいものをつくろうと熱くならなければなりません。そのときいちばん大事なのは、教員と学生の緊張関係だと私は思います。ですから、学生さんも実は、「おもしろくないし、これ、やーめた」という発想で来てもらっては困る。しかし、教員の先生方が授業はできるだけ無難にこなして研究、研究でも困る。そのあたりの緊張関係をお互いに持っていない限りは、いい授業はできないだろうと思います。

最後に評価のタイミングと関連して言いますと、通常、授業評価というと学期末にやるわけです。そして次の学生さんに活かす。しかし、その学生さ

んには活かされてこないという問題があります。この意味で授業評価は、授業前の診断的評価、授業期間中の形式的評価、そして期末の評価とタイミングよくやる必要があると思います。さらに評価のやり方としては、教員側からの、あるいは学生側からの一方的な評価というよりも対話的授業評価という問題がいちばん重要なのではないかと考えております。授業が終わったら、私は必ず学生さん2～3人と話をすることにしています。「今日はどうだった?」と言いますと、「いや、先生、よかったよ」「先生、ここはこうしないほうがよかったね」「そうか」などと言いながらやっていく。このような一つの相互交流型のスタイルでの授業評価がこれからもっと重要になるのではないかという印象を持っております。

時間が少し延びたかもしれませんが、どうもありがとうございました。(拍手)

佐々木 松尾先生、熱弁、ありがとうございました。それでは、ここで雰囲気を変えまして、学生さんのご意見を伺ってみたいと思います。まず最初に、尾形君から話していただくかと思えます。尾形君は、コミュニティ福祉学部3年生で、学生による何らかの評価の計画をどこかで練っているという学生さんで、われわれ教師にとっては恐ろしい学生さんかもしれません。どうでしょうか。

尾形 こんにちは。コミュニティ福祉学部3年生の尾形です。何分こういう場所に慣れていないので、原稿を基にししゃべらせてもらいますので、よろしく願いいたします。

まず僕がなぜこのシンポジウムに出ることになったかを、余談ですが、話させていただきます。別に勉強ができたからとか、学校主催のイベントに参加していたからということで出たのではないんです。勉強がどのぐらいなのかは僕の友達がよく知っていると思いますが、ただ、かねてから学校のいろいろな部分にすごく疑問を持っていて、その一環として教員評定を行いたいなという話を顔なじみの教員の方々にさせてもらっていました。その際、このシンポジウムが行われるという話を聞き、加えて、さらには出てみないかという話をもらって、ここに立っているわけです。

この学校で授業を受けている学生は、けっこう授業に不満を持っているにもかかわらず、正式な形でしっかりした教員への対応、接し方を行わずに、陰でこそこそ言っているのを聞きます。僕のいるコミュニティ福祉学部は新設の学部です。できたばかりで事務的な面でも、校舎の設備的な面でも、学生が教員に対してと同様に、陰でぐちぐち言っているのを聞いていて、それも視野に入れたうえでの評定にしたいと考えていました。そのぐちぐちがいやで、言うならばつきり言おうぜというところから考えて、やろうと思ってい

ます。今回の話から外れるので、この話はしないでおきます。

僕が話す以上は、教員の方々に対する評定に関して話をしたいと思います。まず、教員が授業を評価することに関して皆さんがどう思うかという話をさせてもらいます。

一つひとつの授業の理解やどのように勉強しているかというテストなり出席なりを基に、教員の方々が判断し、数値化、記号化する行為が評定だと思えます。ある意味、小学校、中学校、高校、大学でもそれは平然と行われている行為です。僕はこの行為自体は、構わないのではないかと思います。学校側が多数の学生のことを授業面の履修に関して確認しつつ、その学生の卒業を、どれだけの授業を理解したか、単位数などで判断する以上は、その基準として自分の行っている授業をどの程度学生が理解できたかで示していくことは、必要悪ではないかと考えています。

さすがに何百人もいる学生一人ひとりでありとあらゆる面から確認して判断していくことは、教師にとって困難であり、ある特定の基準・手段を用いて現状を示していくことは必要なことだと考えます。しかし、そうした行為を、やむを得ずにしろ何にしろ、一人ひとり面接をするなど、教員が個人との接触を持たない以上は、また少数クラスにおいて各自を確認しながら授業を行わない以上は、その評価は教員から学生に対する一方的なものになりが



尾形比呂和さん

ちになってしまうのは、やむを得ないと思います。

教員は、根本的に知識やものごとを考えるきっかけを投げ掛けるのですが、逆に学生側が寝ていたり、来なかったり、後ろのほうで騒々しくしていたりしたら、それは論外だと考えます。やはり授業は双方でつくっていくものと松尾さんが熱弁されましたが、僕もそう思います。

主義主張をはっきりと授業中に発現できる学生がいる場合、教員のもとへ行き質問してしっかりと尋ねている人に関しては、そういうことはないでしょうけれども、必ずしもみんなが教員に対して接触を行えるとは考えられません。本当に忙しくて時間の空けられない人や、どうしても臆してしまって接することができない人など、さまざまな人が学生のなかにはいます。

また、教員のなかには差別発言を行って問題を起こしてしまう先生もいますし、自分の授業の予習を行わずに、言っていることが支離滅裂な先生もやはりいます。教科書をただ朗読するだけの教授なども、さまざまあります。このなかには学生の方が多いと思うので、

心当たりのある人もいるのではないかと思います。そうした教授もまた学生を評価しています。かといって、教員にそのことを告げても、1人の意見だときちんと接してもらえない場合もありますし、実際にそういう教員がいましたというか、自分が接したときにそう感じました。

しかし、学生は金を払い、授業を受けに来ています。教員は学生を教えることによって給料をもらっています。しっかりした授業を受ける権利が、学生にはきちんとあります。同様に、しっかりした授業を与える権利が教員にもあります。学生は勉強するために来ているのだから、わかりづらかろうが何だろうが、教員に合わせて勉強しろ、言いに来ることもないやつにいちいち構ってられないといった形で括ってしまってよいわけではないと考えます。そうした教員に授業を改めてもらうことも権利の一つと十分言えます。

何度も言いますが、学生側が眠っていたり、騒いでいたりしては、教えようがないのですが、学生にもそうした形での協力や参加する義務があります。周りに迷惑をかけてはいけないという義務がきちんとあります。

教育を直してもらう機会は、一般の学校はどうなのかわからないのですが、少なくとも私が過ごしてきたなかでは、この学校は少なかったと思います。直そうと思って事務に掛け合っ、て、教員評定をやりませんかという話をしました。池袋はどうかわかりませんが、新

座の事務には「ちょっとそれはこっちもつらいんだよね」と言われました。でも、そういう態度だとちょっと寂しいかなというのがあるのですが。

そこで、ある先生に「事務にそういうふうに接せられたのですが、どう思いますか」と言ったら、「尾形、それは言わずにやるんだ」と言われました。黙ってやってしまえば、文句は言えないと言われたのですが、学内でやる以上は、いちおう話をしてきちんとできたほうが、長続きしますし、本当にきちんとした形で公表するのなら、評定はそのようにするべきだと思うので、その手段をとりますが、そういった機会は少なく感じられました。

教員側から接触をリアクションペーパーなどで行っている、本当に意見を聞きたい来ていない学生からは、当然何もありませんし、点数が下がることを恐れて素直に書けない人がいる様子もあるという話を聞きます。本当に文句のある学生は、書くのも面倒臭くなって書かなかったりするでしょうしまさに「学生が授業を変えられるか？」というシンポジウムの題名どおり、最後にクエスチョンマークがついてしまうような内容です。

また、長年教員をやっていると、自分のやり方にプライドを持ち過ぎてしまって、周囲の意見を素直に受け入れられない先生もいます。当然、教員も機械ではなく人間なので、感情や嗜好が存在しますから、そうした場合に自分の教育の形態に関して問題意識を駆

り立てられる存在が必要なのではと考えています。

そういった意味から、学生や外部による教員に対する授業評価は非常に重要なものになるのではないかと考えます。これを行うことによって、学生の要望、教員が学生から何を求められているか、どんな内容を求めて学生が来ているか、また自分は本来どんなことを教えていきたくったのかという見直しなど、教員自身の現状把握としても大きな意義を持つことになります。

学生には怠慢な授業、やる気のない教員の授業、わかりづらい授業などではなく、しっかりとした自分の求める内容の授業を受ける権利が必ずあります。そのためにそうした学生からのアプローチの一つとして、逆評定の手段が考えられます。たとえば教員に対する評定の例ですが、ほかの学校においてもそうした逆評定的なものが存在しています。

先ほど安岡先生ともお話しさせていただきましたが、たとえば東京大学に友達がいるので、いろいろな話を聞きました。東京大学では、学生主体で逆評定委員会的なものを作成して、各授業の評定を行っています。教員ではなく各授業の評定を行っています。内容としては、学生からの一言や単位の取りやすさ、もう一回受けたいランキング、お得度ランキングなどあります。

おもしろいところでは、顔の怖さランキングなどもありました。たまにいい人がいるとどんな先生だろうと思

ますが、そういうものがあります。人気の教員ランキングなども作って、ワーストやベストで示したりもしています。この点に関しては、多分に教員をおもしろみの対象として扱っています。教員当人してみると、気分がよいとは言えないかとも思いますが、それはそれで割り切って、そうした逆評定がジョーク的要素を加えて存在しているという例です。

私事ですけれども、そうしたジョークの要素の部分は、教員の存在を概して身近に感じさせるという利点もあるので、いいのではないかと思います。話を元に戻します。大学としての逆評定は、友人の話からすると、一般的に一つのアミューズメントとして扱っていると聞きました。あくまでこれは東京大学の例です。しかし、「一言メモ」というところには、アミューズメントといっても、きちんと具体的に、何々がわかりづらかった、聞きに行ったのにいま一つわかりやすく教えてくれない、授業はおもしろいけれども内容が授業本編と関係ない、単位を取るならこれしかない、何々についてより深く追究したい人は取ればいいが内容的には難しいから覚悟して受けてくれなど、授業や教員に関する耳を傾けたい内容も存在していました。

ただし、こうした授業評価を各学生が行うことに関しては、何点か問題があると考えられます。これから少しその点について話させていただきます。

まず、評定を行う際の形式ですが、

発表の形式によっては単なるアミューズメントでしかなくなってしまうことがあります。アミューズメントとして教員を扱うために起こってしまうことですけれども、アミューズメントとして行うならいいのですが、おもしろい項目ばかりが目立ってしまうのでは、授業改革のきっかけや教員への要望などを目的とする場合には、その目的がぼやけてしまう場合があります。

またその結果いかんによっては、ある特定の授業を衰退させてしまったりする可能性があります。授業難易度、内容、単位の取りやすさランキングといった評定を行ったとすると、結果によっては授業に来る学生が1人、2人になってしまう可能性もあるということです。逆に、単位目的で来てしまつて、とんでもない人数になるかもしれません。これは必要以上に評定内容が重要視された場合に起こり得る可能性です。評定の信頼度や歴史いかんによって影響力が異なるでしょうけれども、あり得ないとは言いきれません。

三つ目には、逆評定が単なる教員の悪口になってしまうことです。学生からの一言メッセージなどを載せる場合、アンケート結果として大量の要望や苦情があふれる可能性があります。そうした場合にそれらをすべて挙げて読んでみると、単なる悪口の内容になりかねないということです。一方的に要望や苦情を書き立てるだけの評定では、その評定としての授業の再考や、さらによいものにするという意義的にも、

やや勝手なことを言っているようでもありますし、何よりも自分がやられていやなことはしないほうがいいと思います。

僕は悪口をただ言いまくられるのはいやなので、ですから、それこそそんなことを言われたら、だれだ、きちんと話そうぜという感じになってしまいます。一方的な悪口などではなくて、あくまで双方に授業を行う権利や授業を受ける権利があるので、お互いに授業に参加しつづけているという意識を忘れないようにしなくてはなりません。そのうえで、評価する側の発言や発表の仕方を考えます。好き勝手に言っているというわけではなく、やはり言うからにはしっかりとした意見の形でなければ説得力が認められません。

四つ目には、配布の方法によっては内輪話で終わってしまいます。教員の耳には届かない可能性もあります。集めたアンケートなどを集計したり、編集し公表する際に、その手段も大きな問題になります。自費で冊子化して出すにしても、小部数では協力してくれた人、欲しい人全員に渡るとは限りませんし、教員の手全部に渡るとも限りません。そうになると、意義も半減してしまうことはお察しのとおりです。教員の方々への逆評定なので、アンケートに答えたからには情報公開を求める権利があるので、内容的にも知りたい人全員に公開されて初めて意義があるものになります。

これらのことに関しては、いろいろ

な対応の仕方があるでしょうけれども、私としてはまず、アミューズメント色もちょっとしたジョークなら集計の一つとして見たときに何だかんだといつてもおもしろいですし、これを機会に教員と学生との距離が縮まることもあるでしょうし、ほどほどにですけれども、やることを考えています。

また、集計結果いかんによって、学生が特定の授業に全く出なくなってしまったり、出過ぎてしまったりという状況になった場合に関しては、仕方がないのではないかと考えます。確かに学校側、教員側としては問題になってしまうでしょうけれども、覚悟してもらわなければならないことであり、それが学校側の求めた教員、その授業を教えている教員自身の方法がその程度のものだったという結果として見ていただきたいと思います。そうした判断をしていかなければなりません。

きょう、朝少し遅く起きてテレビ東京をつけたところ、「わ!!つNOW」というテレビ番組をやっていました。観た方がいらっしゃるかどうかわからないですが、そこで教員のことを話していました。ある外国人が、アメリカでは、教師が教育者として悪くても研究者としてすばらしい場合、研究者としてすばらしいけれども、教育者として全然使い物にならない場合は、すぐにクビだという話をしていました。そういうこともあるんだなと思いましたけれども、それは相応の結果ではないかと考えます。それは現在におけるそ

の授業の評価ですし、やむを得ない状況です。

とはいっても、卒業までの必要単位等の理由で学生が全くいなくなるという授業は、ゼミを除けばほぼあり得ないと思います。ですから、集まる授業を行えば、きちんと学生は集まるようになります。この評定を単なる悪口集にしないためには、学生の意見を要望に限らず、その授業を受けてのよい意見も同時に集める方法があります。また教員というよりは授業を評定する形で行い、個人パッシングの形をできる限り避けます。あくまで授業を評定にするのです。そうすることで双方の意見が見えて、教員も自分の授業のやり方に関して取捨選択が行えると考えます。

評定後の公表方法に関しては、冊子を自腹で作成し、まとめ、配布する方法や、ポスターのようにして張り出す方法などがあります。冊子を作成して売り出す方法もありますが、東大はこの方法をとっています。金額は忘れませんでした。そういうものがありますけれども、個人的に最も考えているのは、学生による評定行為を教員の皆さんが悪いものと考えずに、何らかの形でわれわれにサポートを行ってくれることが、学生の身分でしっかりとした逆評定をすることになると思っています。自分たちのためでもあるとの意識を持っていただいて、コピーに関して、また編集時の紙などに関してサポートしてもらえると、すごく有意義な形できちん

と結果発表できますので、松尾先生、もしよかったですらお願いします。

これまでちょっと好き勝手を言わせてもらいましたが、確認したいのは、逆評定は学生が教員を一方向的に評定することではありません。お互いを見直すということです。教員から見た学生は一对多ですが、学生から見た教員はあくまで一对一です。つまり、お互いの意思疎通がどれだけなされているかが授業の雰囲気や内容に影響していくということです。そうした状況をうまく利用して、お互いに授業をつくれることを見直し、問い続けようということです。

学生に受け入れる態勢がなければ、教員がいくらよい授業を行っても全然意味がありません。逆に、学生側が受け入れ態勢でも、教員が独りよがりの授業を行ったのでは、意味がありません。授業は学生と教員の両方がいて成り立つ空間なので、その環境をつくるのは双方の責任になります。お互いに立場を理解したうえで授業に参加しているという意識があつて、初めて以上のことが意味をなすということを、教員側、学生は自分を含めて最後に確認しておきたいと思います。

ありがとうございます。(拍手)

佐々木 尾形比呂和君、ありがとうございました。時間も押してきていますので、引き続いて、文学部2年の橋本和哉子さんにお話をお願いします。橋本さんは、ある意味ですでに立教

において教員についての評価をしている、すなわち、皆さんよくご存じの「セントポールズキャンパス」を編集しておられる方です。では、お願いします。

橋本 こんにちは。文学部2年の橋本和哉子といます。不慣れですが、よろしくお願ひします。

私はいま立教大学で唯一のキャンパス誌である「セントポールズキャンパス(SPC)」で活動しています。きょうはこの雑誌の毎年4月に出る春号で新入生に向けて載せている、全カリ特集で行っている授業評価についてお話ししたいと思います。全カリ特集は、今年の春に出した号の場合は、テストのみで単位が取れる授業、出席さえしていれば単位が取れる授業、楽しめる授業、ちょっと難しいけれどもためになる授業という4部構成になっています。だいたいこの4部について、授業を六つぐらいずつ載せているので、だいたい24の授業が載っていることになります。

その授業は、いちおういい授業をメインに、主に載せるようにしています。楽勝科目ばかりを羅列しているわけではなくて、いちおう学生がとりたいたいと思うような、興味が持てるような、お勧めできる授業を載せるようにしています。

授業の内容のデータについては、いちおう学生、だいたい200人ぐらいにランダムにアンケートをとって、思ったことをそのまま書いてもらうようにし

ているので、学生の生の声が反映されているかと思います。アンケート項目については、学生が実際に履修を組む際に参考にしてもらおうと思っているので、基本的に興味があるだろうと思われる項目について項目を考えています。

集計方法としては、アンケートに、テスト1回で単位の来るもの、出席さえしていればだれでも単位の取れるもの、楽しいもの、難しくてもためになるものを一つずつ書いてもらっています。その書いてもらった授業について、それぞれ評価方法はテストかレポートか、出席はとるかどうか、教科書が要るかどうか、テストは持ち込みをしてもいいかどうかなどについて聞いて、さらに興味を持てるかどうかの度合い、簡単かどうかの度合いを3段階評価で行ってもらっています。さらに、そのほかにも感想についてアンケートに記入してもらいます。

その結果を多い順に集計して載せる授業について決め、各項目ごとにアンケートどおり、だいたいアンケートの結果は同じになっているのでそれを載せて、興味度と簡単度についてはすべて書いてあったものの平均値を載せるようにしました。感想は、いくつかあるなかから私が実際に読んでみて、これはすごくいいのではないかと、特徴をとらえているものについて述べてみました。

授業のデータが載っているものとしては、いちおう履修要項を皆さん参考



橋本和哉子さん

にするかと思いますが、履修要項は実際の授業とすごく違うことが書いてあったり、すごく分厚くて量があるので、隅々まで読むのはすごく大変です。

「SPC」だと短い時間で細かいところまでわかるので、参考にしてくれている人もけっこういるみたいです。

全カリ特集用のアンケートをまとめていて思ったことですが、特に全カリの授業については、つまらないという人が多いんです。楽しい授業、難しいけれどもためになるような授業などないという人もいました。大学に入るときは、授業についてすごく期待して入ってくるかと思いますが、実際に入ってやってみると、理想と違うか思っていたものと現実とにすごくギャップを感じている人が多いかなと思います。

みんながつまらないと言うような授業に関しては、だいたい大教室でただ坐って聴いているだけのような講義形式の授業は、眠くなるなどといって嫌いな人が多いようです。でも、卒業するのに必要だから、単位が簡単にもらえるから受けるということが多いみたいです。

人気がある授業ということでアンケートに書いてあることが多いのは、だいたい自分で活動するような授業が多いんです。たとえばコンピュータにしても、大教室でみんなに黒板に書いて説明するような講義形式のものよりも、実際にコンピュータの前に坐ってやってみるほうに人気があるんです。体育などもやはり人気があります。やはり自分で体を使って動かす授業、自分の意見を発表できるような授業は、毎年人気があります。あとはだいたい身近な内容の授業などで、恋愛論についての授業などはいつもすごく人気があります。「メディアとスポーツ」という授業がありますが、いつもテレビで観ているような人が、その人にしか話せないようなことを話しに来てくれるような授業も、いつも人があふもていますね。

学生も実際自分が興味を持てるような内容だったら、きちんと行って、きちんと聴いていると思います。でも、実際はそうではなくて、つまらない授業だから、単位が取れるもの、テスト1回だけでいいものなどに人気が集まってしまうので、うちの雑誌でも、楽しいもの、ためになるもののほかにそういう特集もやることになります。

アンケートの結果を見て思ったことなんですけれども、大人数の講義は、つまらないものが比較的多いんですね。でも、それに対して、履修届Bといって、人数制限があるような授業は、すごくおもしろいものが多いという結果

が出ました。だから、全カリなどでもなるべく少人数でやるといいかなと思います。学生が本当に興味を持てるような授業が多くなるといいと思います。

でも、現実的には、授業の間にもおもしろいものとそうでないものがあると思います。だから、学生の生の声を学生にそのまま知らせるということは、必要なのではないか。情報公開の意味でもそのように思います。

ありがとうございました。(拍手)

佐々木 橋本さん、どうもありがとうございました。以上、4人の提題者にお話しいただきました。それでは、4人の方々にまたこちらにお戻りいただきまして、質疑応答をいたしたいと思います。

Ⅲ	質疑応答
---	------

佐々木 まず安岡先生、お話の総括をお願いしますか。

安岡 お話を聞かせていただきまして、たいへん有意義でありました。まず私が感動したのは、学生さんがそれだけ活動しているということです。東海大学はかなり教員サイドで進んでおりますが、教員サイドで進んでいるからというわけではないと思いますけれども、学生さんがそういうことに対して活発でないということです。そういう意味では非常にうらやましく感じま

して、何といっても出資者がそういうことをすれば、授業を変えられるというのが私の感想ですので、ぜひ頑張っていたきたいと思います。

きょうの早稲田大学でのシンポジウムでも、いろいろな大学の方が言っていたのですが、先生方が協力的でない。なかなかやろうと思ってもできない。そのときに私、同じことを答えさせていただいたのですが、「ではやりましょう」と言ったら、みんなが「はいやりましょう」と言うことができるようなことであれば、そういうことが実施されてもあまり意味がないと思います。ところが、先生方がそれだけ抵抗することをやれば、私は画期的に授業が変わると信じていますので、そういう思いで頑張っていたきたいというのが私の感想です。

佐々木 どうもありがとうございます。それでは、相互にも意見を交換したい、質問したいということがあると思いますが、まずきょうせつかくおみえになった皆さんのご質問から受けたいと思います。安岡先生、松尾先生、尾形君、橋本さんに意見を聞いてみたいということがありましたら、どなたからでも口火を切っていただけませんか。

フロア1 コミュニティ福祉学部の2年の●●です。松尾先生の調査の表5のところで、いちばん下の「学生にうけのよい授業が、私にとってよい授

業である」が「はい」が16.8%と非常に低い数字なんですけど、私が思うには、大学の授業に対して学生は知的探究心というか、そういうものを盛り上げられるような授業を期待しているし、先生方もその楽しさを教えるというか、そういう要素がすごく重要だと思えますけれども、この数字を見てとても失望したんです。松尾先生がこの点もし分析をされていたら……。

松尾 この意味は、内容的な共感というよりも表面的なうけのよさを意味するものだと思いますのでこの数値になっているものと思います。ただ内容的共感の必要性という点で少しのべさせていただければ知的好奇心をどれだけくすぐることができるかが重要ですね。「なるほど」、「目から鱗」などとたまにリアクションペーパーに書いてもらうと、「やったあ」というものがあるわけです。しかし、十分に知的好奇心をくすぐる内容をもっていたとしても学生にうける、ここでは、笑いをとるということではなくて内容的な共感を得ることの努力なしには、知的好奇心をくすぐることはできないと思います。その意味で内容の豊かさとそれを伝えるプレゼンテーション能力の向上がいま教員に求められていると思います。しかし、それには、学生の側も知的好奇心を満たしたいという真剣で強い意志が不可欠です。つまり、その両者の知的興奮を共有したいという緊張関係こそ重要だと思います。



佐々木 よろしいですか。もう一人手が挙がっていましたね。

フロア2 理学部1年■■と申します。全カリについてちょっと思ったのですが、おそらくは学生による評価、教員による評価以前の問題というものがしばしばあると思うんです。実際、私は前期に全学共通カリキュラムでシラバスを見て、この授業は怪しいとにらんで受講してみたのですが、その結果、どうも講師の先生が教えている内容についてさっぱり理解していなくて、間違いばかりしゃべるので、私は毎回、授業が終わった後にその日の間違いをリストアップして提出していました(笑)。そういう授業をする先生やそういう科目をチェックする方法、前もってはねる方法が何かないかと思っています。

その授業でもやはり学生はフムフムとうなずいてノートをとっていましたし、学生によると出てこない人もいます。そしてまた専門の問題がありますから、教員による評価で出てくるのかなというのがちょっと不安なのですが、

そういうものを導き出す方法は何かあるのでしょうか。

佐々木 これは難しい質問です。どうなのでしょうね。

安岡 授業評価というのは二面性があると思います。私は、要するに、日本の全体の教育力を上げるためのものと、もう一つ、指導力不足教員が教壇を去るための手段をつくる。こういう二つがあるんですけれども、私は、人数からいうと、去らなくてはいけない教員はわりあい少ないと思っています。したがって、もうそんなところに目を注ぐよりも、今は日本全体の教育力を増すことが大切ではないかということで、いい方向を褒める。要するに、学生さんを褒めるのと同じに、教員を褒めるという姿勢で臨むべきではないかと思っています。

しかしながら、必ず何かそういうことを議論すると、指導力不足の教員をどうするかというところに行ってしまうんですけれども、緊急の課題はそれらではないと思います。

佐々木 ありがとうございます。司会者が補足をすべきではないと思うのですが、同じようなテーマ、同じような専門に関して複数の授業が開講されていることがしばしばあります。できるだけ複数の授業に出てみて自分の視点を確認することが大事だろうと思います。特に人文社会系の分野につい

てはそういうことが言えます。理科系についてはちょっと私は自信がありませんけれども。そういった意味で、単位に関係なく自分のいま出ている授業に対する自分のスタンスを確認する意味で、似たようなほかの授業にたまには出てみるということを、私は強くお勧めしたいと思います。

フロア3 経済学部1年の▲▲と申します。きょうの授業で思ったことなんですけれども、皆さん、TAはご存じですか。専門の授業の場合、授業の終わりぐらいになると出席カードを配ったり、先生の手伝い、サポートをしたり、教授のそばにうろちよろちよろしているTAという人がいるんです(笑)。きょう、僕はちょっとわからないことがあったんです。大教室だったんですが、TAさんが僕の近くに坐って自分の勉強をしていたので、ちょっと聞いてみたんです。TAさんは大学院とかで、もっと勉強していらっしゃるし、聞けばいろいろなことがわかるのではないかと聞いてみたんですけども、「いや、わかりません。あとは教授にお聞きください」と言われてしまって。じゃあ、おまえ、何なんだよと思いました。

TAというのは先生の補佐なんでしょう。ということは、わからないところを聞いたら教えてくれるのが、TAでしょう。アメリカなどではそうだと思いますよね。アメリカのTAは、同じ授業、一つの授業を10回、20回聴い

て、TAとしてその授業に配属されるんですね。だから、学生にどんなことを質問されてもTAはちゃんと答えてくれる。そういうものが日本には定着していないと聞いたことがあります。

その点、立教大学のきょう会ったTAは、要するに雑用係ではないですか。そういうものだったら、僕がやりますよ。先生の周りをちょこちょこするだけでしょ。では、何でTAは必要なんですか。もっとTAを改善する必要があるのではないですかという疑問を持ちました。

佐々木 ありがとうございます。この場におみえの先生のなかでTAをご自分の授業に導入しておられる方はいらっしゃいますか。

安岡 ご指摘のとおりだと思いますね。立教大学のTAが悪いというわけではありませんけれども、日本の大学全体のTAがそういう状態だろうと思います。

アメリカでは、1960年ごろに教授たちが論文を書かなければクビになるということで、論文だけを書いている。そういう状態が続くと、大学の教育力が落ちたんですね。そこでTAが登場するわけですが、TAが登場したら、やはりTAの教え方が悪くて、アメリカ全体の学力というか教育力が落ちたんですね。それを補うために、アメリカでは大学がまずTAに対して研修をする。学部が研修をする。学科が研修

をする。その科目が研修をするということを行って、今世紀最大の大学の発明品はTAだと言ったんです。ご指摘のようにかなり訓練を受けた者がTAをやっているという状態なんです。

では東海大学はやっているかというところ、東海大学は、大学全体でのTAの講習、学部の講習をやった者だけがTAを受けられるようになっていきます。でも、具体的に細かいことまでは今のところはやっておりません。ということで、ご指摘のことは、現状では日本全体に言えると思います。

佐々木 立教大学のTAも、研修の時間が全くないわけではありません。TAの給与のなかには研修の時間も含まれております。ただ、ご指摘のとおりということ、TAが始まってまだ3年目ぐらいですからね。これから皆さんのそうした刺激を受けて、緊張感を持って、TAも制度を充実していかないとならないと思います。ありがとうございました。

フロア4 先日の話なんですけれども、学業奨学金をもらう面接があったんですが、面接官の方とけんかをしたんです。なぜけんかをしたかというところ、プロのダンサーになりたいという私の知的好奇心を全面的に否定されてしまったんです。

そういう人間性を持っている先生方は知的好奇心のある学生が満足できるような授業をすることも、絶対不可能

なんだろうなと思うんです。

佐々木 そういう現状をどう思いますかということですか。

松尾 いま聞いていて、非常に寂しい思いがいたしました。私も教員の仲間といたしまして、本当にそんな人がいるのかなと思いました。

先ほどから私は、学生さんが評価をしてくださることは、教員の態度、ものごしに影響される部分が大きく、部分的、限定的でしか、評価の受容・解釈は、難しいだろうと言ってきたわけですが、いま聞いていて、熱いとか、人間性とか、公平に扱うといったことは、もしかしたらそれが授業の前提でありながらその点にその教員のすべてが反映されているのかもしれないとも思いました。

フロア4 先ほど先生を排除するというのはあまり重要課題ではないとおっしゃったんですけれども、そういう先生がいる限り、何も変わらないと思うんです。

安岡 おっしゃるとおり、そういうことをしたらいいのですけれども、やはり私は、数のうえから言うとき少ないと信じているんです。だから、そこに目を向けると、日本全体の教育力の向上のほうには目が向かない。

個々の例をとると、そういうことは多々あると思います。では、個々の例

はどうでもいいか。そう言われると困ります。個々の例も大切なんですけれども、いま日本の大学全体が教育力に瀕している状態と考えれば、まず教育を認める。悪い先生を罰するのではなく、いい先生を褒めるという大原則で私はいいのではないかと考えています。それを確立することによって、よくない先生は淘汰されていくと考えたほうがいいのではないかと私は考えています。残念ながら、個々のことを言うと、放っておいていいかという、決していいわけではありません。

でも、全体の方向は、教育をよくやっている先生を認めるということをするれば、逆にいえば、そうでない先生は淘汰されていく。この日本の閉鎖的な社会から考えると、排除するということを打ち出して教育改革を進めると、進まないという現状があるのではないかと私は思っています。

フロア5 立教大学経済学部4年の■■と申します。よろしくお願ひします。

ちょっと一言、お尋ねしたいんですけれども、「学生が授業を変えられる？」ということがテーマになっています。授業評価で変えていこうということなんですけれども、授業評価だけでは、とてもじゃないけど、授業は変えられないと私は思うんです。

というのは、ほぼ終わりましたけれども、私は就職活動をやっています。大学4年生はやはり就職活動をしない

といけないんですね。ほとんどの人がそうだと思うんです。卒業単位が124単位ですか。それはたぶん4年間で124単位取ることなのかかもしれませんけれども、実情、3年間で124単位取らなければいけないわけなんです。卒業見込証明書という、卒業できるんだかできないんだかよくわからないようなものを基にしてやるわけですから、そこを考えていきますと、やはり楽勝科目といいますか、いわゆる単位をくれる授業を当然みんなとって行く。それで3年までに何とか124単位終わらせよう。4年生では安心して就職活動をして社会に出よう。そういうことになってしまうと思うんです。

やはり授業を変えるには、制度そのものも変わっていかなければいけないのではないかと私は思います。制度というものについてどう考えておられるのかということをお伺いしたいと思っています。

佐々木 どういう制度を考えていますか。

フロア5 たとえば4年で124単位になっているわけです。4年間で勉強するわけだけでも、実際は3年しか勉強できないわけです。ですから、たとえば思い切って、3年間で124単位なら124単位にしてしまっ、4年生は就職あるいは卒論、授業はやめてそういったものにあてる。あるいは、3年制大学にしてしまっ、卒業後に就職活

動をしていくようにしたほうがいいのではないか。そういったことをぜひお願いします。

安岡 残念ながらお答えにはなりません、私、最初にカッコよく1単位として45時間勉強しろと言ったわけですね。45時間というのは1日8時間労働した1週間分の仕事に対して1単位与えると言われているわけです。それが正しいかどうかは別にして、それだけ勉強するわけですが、日本の全大学生の平均をとると、1日の勉強量が1時間足らず、50分ほどなんです。1単位について45時間のギャップから考えても、これはギャップなどというものではないと思います。

私はカッコよく45時間と言ったんですけれども、きっちり45時間することを念頭に置いているわけではなく、要するに、日本の大学全体がもっと勉強するようにということです、3年間でやれば単位が取れないなどということではないと思っています。

要するに、1単位について45時間びっちり勉強すれば、それは4年間びっちりかかるわけですが、たとえばふつう単位の上限を決めているところは、だいたい日本の大学ですと20単位から24単位を上限としているわけです。そうすると、1単位について45時間の時間にはならないんですけれども、1単位について30時間の勉強であってもいいかと思います。30時間勉強することというのは、今の勉強量よりはるか

に勉強しなくてはいけないということです、額面どおり1単位=45時間そのままをとるということではなしに、今よりもかなり勉強する状態をつくるのが当面問題だろうと私は思います。

したがいまして、私は特別システムを変えなくても、今より日本の大学生が勉強する状態はつくることできると思っています。

すみません。あまり回答になっていないかもしれませんが。

佐々木 ちなみに、1時間といっても大学の授業を聴いている時間を含め、自学自習している時間も含めて1日8時間。45時間というのは、それをつくったときに、労働者が1週間に45時間労働の時代だったということです。今は40時間、あるいはそれを切っているような時間なので、学生さんの1週間の勉強時間もそのぐらいでいいかなということでもあるかもしれませんね(笑)。

フロア6 経営学科3年、▲▲と申します。私はいまある人気授業を履修しているのですが、受講者数が多過ぎて教室に入れずに帰っていく学生がたくさんいるんです。いくら内容がすばらしくても、設備不足のためにその授業を受けられない学生がいるわけで、私はそのことをたいへん不満に思っているのですが、実際に教壇に立っておられる先生方は、そのことについてどう思われるのか。またよりよい改善策

があるのかどうか。お考えを聞かせてください。

佐々木 いまのご質問に対しては、われわれよりフロアにおられる全カリ総合部会長のほうがいいかな。

松尾 その前に、いま私は後期に「遊びと人間」という総合Bをやっております。まして、受講者数が840人ぐらいいます。最初、100人~200人ぐらいだろうと話をしていたら、どっと来てくださったので教室を変更させていただきました。そうしたら、十分に収容できる教室が空いていないということがありました。

だいたい毎期、登録者数と実際受ける人数がよくわからないところもあるので教室の配分は非常に難しい。今回の場合十分な部屋がとれず今は満員の状態で、立ってくださっているわけです。毎回550人ぐらい来てくれています。困ったな。では、先生、どうしますか、となったときに、その時間、あと残っているのは、タッカー、入学式などをやる場所しかない。そうすると、急激に広くなり過ぎて、授業での臨場感がなくなる。さあどうしよう。

まさにいま言われてドキッとしながら、部会長にお答えいただきたい。

齋藤（全カリ総合部会長） この問題は私たちも頭を痛めています。ただ、施設の関係で教室が足りませんので、やむを得ずこういう形でいま実施しているわけです。たとえば人数制限をし

たほうがいいのではないかと。そうすると、逆に聴きたい授業を聴けないという弊害もまた出てくるんです。ですから、スペースを大学のほうには十分用意していただきたいということで、お願いしているんですが、それはちょっと一朝一夕にいかないの、なるべくコマ数を増やしてなるべく多くの学生さんに、あるいは全員坐れる会場にということで、今のところは対応しています。ただ、そういう声が学生さんのほうからもしあれば、大いに声を出していただきたい。あきらめないで、大いに言っていた方がいいのではないかと思います。

ただ、だからといってすぐ実現できるかどうかはわかりませんが、われわれもいろいろ対策は考えております。それに対しては、皆さんからも言っていただいて、一緒に考えていきたいと思えます。

お答えになっているかどうか、わかりませんが、今の段階では、そういうことをご勘弁いただいているというのが実情です。

佐々木 ありがとうございます。これをやろうと思えますと、皆さんに対して若干の不利益になるような制度変更をせざるを得なくなる。たとえば履修制限を厳しくかけるとか、あるいは、今は履修登録したものをやめるのは自由ですけれども、やめてはいけない、やめたものはDがつくといった変更をしますと、教室規模も読みやすく

なってきますし、履修登録した数だけの教室を用意すればいいわけです。だんだん減ってくるだろうなどということを考えないで、教室を確定できるわけですが、そういうことも今後の検討課題になってしまうかなと思います。

尾形 自分が受けていた授業で、学生が椅子に坐れなくて、後ろで坐って書いているという状況があったんです。その際に事務の方に行ったら、教授から言われないと基本的には変えられません、教授に言ってくださいと言われたんです。教授が言わないから自分たちが言いに行っているのに、そういうことがあったんです。それはちょっと事務の方々、覚えておいてください。お願いします。

皆さんの話を聞いていると、学生が授業を変えられるという感じなんですけれども、学生が学校を変えられるかという質問はどうかと感じられました。自分が考えている、思っているのは、やれないという引け目が自分にありますので、やはりやれば変わると思います。たとえば奨学金の話に出た教授がいるとか、いろいろな学校自体にかかわることがありますね。事務の接し方がひどいとか、そういうことも変えようと思えば変わるだろう。それは1人の意見だと結局、事務も1人だと思います。それが公的に文書とか、みんながわかる形できちんとやれば、変わると思います。そう思われた方はやはりやったらいいのではないのでしょうか。

自分はそう思いました。

授業を変えることも、学校を変えることも、基本的にはやはり一緒なんだなという形で、皆さんの話を聞いていて思いました。

佐々木 ではもう一人だけ。

フロア7 社会学部3年の※※です。すごく基本的な質問なんですけれども、たとえば授業のなかに、内容がある程度高度で、かつマニアックなものがあったって、でも、僕は受けていておもしろかったという授業があります。授業を評価するということは、ある意味、学生が求めるものにある程度追いついてこないといけないとすると、ある意味、少数しか受けたいと思わない授業などが、杞憂かもしれないですけども、一歩まちがえればつぶされてしまうということにならないでしょうか。

松尾 それもとても重要な問題だと思います。授業評価を見るときに、一言書いてもらうじゃないですか。少数派の意見をわれわれはどうとらえるのかという指摘だと思います。少数派の意見を、たとえばマニアックと表現されましたが、そういうものは、逆にいうと、ものすごく大事にしなければいけない。

だから、授業評価をすればいいというものではなくて、それをどう読み取るかという作業が、実はきょう、課題として残されたのではないかという気

がいたします。

安岡 競争原理の働く環境をつくる
と、おっしゃったような可能性がある
と思います。そこで、その授業をなく
すかどうか、存続させるかどうかとい
うのは、その大学あるいはその学部、
その学科の見識だろうと私は思います。
したがって、全体は競争原理にな
っていないかと思いたいと思いますが、
最後のなくすかどうかは学部・学科の
見識ということで、なくなるというこ
とではないと私は思っています。

佐々木 ありがとうございます。

フロア（教員） 「学生が」とある
ので、教員はなるべく発言しないよう
に思っていたのですが、最後に一言
だけ提案したいことがあります。

先ほどからしきりに声を上げなさい、
上げなさいと学生に呼びかけていなが
ら、では、どこへ行ったらいいの
か。それは全くないですね。ですから、
やはりその窓口と言うかどうかはわか
らないけれども、授業評価というもの
だけでやっていくのではなくて、やは
り学生がいろいろなものを変えていき
たいという気持ちがわき上がってくる
ように、そういう窓口のようなものを
つくっていく必要があるのではないか
と思います。

そうしないと、声を上げなさいと言
ったって、それこそ、学生が1人で何
か言っても、何もなし。教授でなけれ

ば受け付けませんというようなことにな
ってしまうと、やはりダメだと思う
ので、提案は提案として結構ですけれ
ども、やはり受け皿をきちんとつくつ
たうえで、それを提案していかないと
いけないかと思いたい。

佐々木 ありがとうございます。
残念ながら、これでおしまいにしたい
と思いたい。きょうはたくさんの方が
集まってくれました。本当に感謝
しています。

それぞれは自分の個人的な問題かも
しれないけれども、それは一部は個人
的な問題であっても、一部に全体の問
題も必ずあります。それをわれわれ教
員と一緒に緊張関係を持ってよくして
いこうという力に変えていきたい。全
学共通カリキュラム運営センターはい
つもそう考えています。そのために窓
口がないのではないかと言われました。
早速あしたからつくりますよ（笑）。
きょうの経験は全く出発点であるし、
出発点ではありますけれども、重要な
一歩で、もう逆戻りはできません。皆
さん、しっかり見て、脳裏に刻んでい
るわけですから、絶対逆戻りはできま
せん。そういう覚悟で、不退転の決意
でわれわれもやっていきたいと思いた
い。

きょうは安岡先生から、たいへん総
括的なためになるお話が聞けたのでは
ないかと思いたい。私もうん、そうだ
ったんだと思ったことがたくさんあり
ました。松尾先生のお話を聞いて、こ

んなことを言うと怒られますけれども、ああ、立教も変わったなという印象を受けました(笑)。尾形君、橋本さんのお話を聞いて、やはり立教の学生はしっかり考えているんだ、やることをやろうとしているんだなど知って、たいへんうれしく思いました。そして、たくさんの質問をしてくれた学生の皆さん、本当にありがとう。私たちの心に響く大事な視点、問題点を挙げてくれたと思います。

これを引き受けて、またあしたから

確実に前へ歩いていきますので、皆さん、しっかりと見ていていただきたいと思います。そして、クレームがあったら、いつでも全カリの窓口の前に来て、ブーイングを大声で上げてください。期待しています。

きょうは時間が不十分で、もっともってお話ししたかったのですが、これでおしまいにしたいと思います。先生方、皆さん、どうもありがとうございました。(拍手)

【自由記述用】

問1 この授業に対する全体的な感想や意見、より充実したものにするための方法論など率直に書いてください。(全員回答)

問2 この授業は2単位科目に値すると思いますか。その理由も含めて回答してください。(スポーツスタディ受講者のみ回答)

資料 2

表 1. スポーツ実習、スポーツ・スタディに関する授業評価項目の因子構造

項目	因子	F 1	F 2	F 3	F 4
Q24 教師のものごし・態度は適切でしたか		0.824			
Q23 教師の話し方・言葉づかいは適切でしたか		0.797			
Q26 教師は学生に対して公平でしたか		0.752			
Q9 教師の指導の仕方は適切でしたか		0.750			
Q25 教師は情熱的・意欲的でしたか		0.747			
Q8 教師の説明はわかりやすいものでしたか		0.730			
Q16 この授業をできればまた受講してみたいと思いますか			0.679		
Q2 意欲的に授業に参加できましたか			0.674		
Q3 授業内容を真剣に学ぼうと努力しましたか			0.650		
Q5 授業の中で達成感が得られましたか			0.613		
Q19 この授業の活動種目を今後、続けていきたいと思いますか			0.563		
Q12 この授業は将来役に立つと思いますか				0.654	
Q27 教材(資料・テキストなど)は適切でしたか				0.616	
Q18 授業内容として知的理解と身体的・技術的向上のバランスはとれていましたか				0.610	
Q15 知的側面と身体的・技術的側面の両面からの理解は深まりましたか				0.588	
Q10 施設・用具は満足できるものでしたか				0.497	
Q21 この授業を通して、この授業を終えても連絡をとりたい仲間ができましたか					0.812
Q22 受講学生数の人数は適切だと思いますか					0.667
Q7 授業の中で教師や仲間とのコミュニケーションがはかれましたか					0.653
	固有値	5.490	4.650	4.050	2.030
	寄与率	20.3%	17.2%	15.0%	7.5%
	累積寄与率	20.3%	37.5%	52.5%	60.0%

【因子名】 F1:教員の態度因子
 F2:授業への態度・関心因子
 F3:授業内容・教材・施設因子
 F4:集団過程因子

表 2. 各因子の分布

	平均値	標準偏差
F1:教員の態度因子	1.62	0.72
F2:授業への態度・関心因子	1.73	0.64
F3:授業内容・教材・施設因子	2.05	0.68
F4:集団過程因子	1.93	0.80
総合評価	1.59	0.76

表 4. 重回帰分析の結果

	偏回帰係数	相関係数
F1:教員の態度因子	0.445※※	0.674※※
F2:授業への態度・関心因子	0.443※※	0.666※※
F3:授業内容・教材・施設因子	0.034	0.537
F4:集団過程因子	0.047	0.428
重回帰係数	0.753	

※※ $p < .001$

表 3. 各因子間の相関関係

	F 1	F 2	F 3	F 4	総合評価
F1:教員の態度因子	1.000				
F2:授業への態度・関心因子	0.586	1.000			
F3:授業内容・教材・施設因子	0.592	0.629	1.000		
F4:集団過程因子	0.441	0.484	0.461	1.000	
総合評価	0.674	0.666	0.537	0.428	1.000

全ての相関において $p < .001$

表5. 大学教員の大学教育観

		質 問 項 目	はい (%)
授 業 観	内 容	1 私は、授業をするのが楽しい	448(61.3)
		2 授業では、最先端の知識・技術を伝えるようにしている	482(64.7)
		3 よい講義をするには、自分の専門領域以外の幅広い知識が要求される	719(96.3)
		4 授業中に教員が人生や社会について余談することは、不必要だと思う	78(10.5)
	形 態	5 演習・実習より講義の方が楽しいと思う	112(15.9)
		6 講義は、教員の一方的な授業にならざるをえない	535(72.1)
		7 演習・実習は、講義よりも学生の主体的な学習意欲を育てる	636(87.5)
		8 講義形式の授業は、学生の学習意欲を低下させる	308(42.2)
		9 私は、演習・実習の準備に講義の準備以上の時間を費やす	318(44.2)
研 究 観	10 大学の教員は、どちらかといえば「研究者」だと思う	537(73.4)	
	11 私にとって授業は、研究活動の負担にはなっていない	453(60.8)	
	12 授業内容と自分の研究は、あまり関係がない	287(38.6)	
	13 立派な研究者でなければ、大学の授業はできない	299(40.6)	
	14 講義は私にとって、自分の研究成果の発表の場である	165(22.3)	
	15 教授会などの公務に追われて、十分な研究時間が持てない	378(50.9)	
	16 大学の同僚の私に対する評価は、研究業績だけで定められている	196(26.5)	
17 学会での自分に対する評価は、非常に気になる	233(32.0)		
学 生 観	18 大学生は、自主的に勉強していくべきだと思う	715(96.1)	
	19 学生は、もっと気軽に教員に話すようにした方がよい	714(96.2)	
	20 学生には、人間形成として授業以外にも大切なものがあると思う	741(99.3)	
	21 多くの学生は、明確な問題意識がないと思う	672(90.8)	
	22 今の学生は学力が低下してきていると思う	543(73.8)	
	23 多くの学生は、学習意欲を失っていると思う	428(58.2)	
	24 私は、授業に学生の要望を取り入れるべきだと思う	612(83.2)	
	25 授業に関する学生の評判は、気にすべきではない	270(36.6)	
	26 学生にうけのよい授業が、私にとってよい授業である	124(16.8)	

出典：須田康之（1989）「大学教員の研究・教育観」．片岡徳雄・喜多村和之編『大学授業の研究』玉川大学出版部．P. 55.

（データの出典：角田昌子・須田康之（1987）「大学教員の教育観分析」『広島大学教育学部紀要』第一部．第36号．Pp. 63-73.）

「スポーツスタディ」及び「スポーツ実習」の授業評価について

スポーツ健康科学教育研究室

1. 「スポーツスタディ」及び「スポーツ実習」の評価について

(1) 全体的傾向

標記の授業評価についていくつかの項目を設定し、「全くそう思う」、「そう思う」、「どちらともいえない」、「そう思わない」、「全くそう思わない」の5件法によって聞いたところ、「スポーツスタディ」及び「スポーツ実習」の評価ともに全体的に概ね良好であった。

(2) 「スポーツスタディ」及び「スポーツ実習」の評価に関する比較

・「スポーツ実習」の評価が高かった項目の傾向

「授業内容に対する期待の一致度」、「授業時の達成感」、「総合評価」等

・「スポーツスタディ」の評価が高かった項目の傾向

「将来への役立ち度」、「日常の健康、体力づくり、スポーツの生活化への貢献」、「教材の適切性」等

	【「全くそう思う」+「そう思う」の合計(%)】		
	全体 (N=1175)	スポーツ スタディ (N=213)	スポーツ 実習 (N=962)
1. 授業内容は期待していたものと一致して いたか	83.1	72.8	<u>85.3</u>
2. 授業の中で達成感が得られましたか	78.5	70.4	<u>80.3</u>
3. 運動やスポーツについての関心が高ま りましたか	76.2	<u>77.0</u>	76.1
4. 施設・用具は満足できるものでし たか	68.0	<u>69.6</u>	67.7
5. 授業内容は理解できましたか	87.5	<u>87.7</u>	87.4
6. この授業は将来役に立つと思いま すか	69.0	<u>77.4</u>	67.2
7. この授業を受けて、運動やスポ ーツに関する興味・意欲は高ま りましたか	77.6	<u>78.3</u>	77.4
8. この授業の活動種目を今後、続 けていきたいと思えますか	79.7	78.9	<u>79.8</u>
9. この授業の学習内容は、日常の 健康や体力づくり、スポーツの 生活化に活用できると思いま すか	82.0	<u>86.3</u>	80.9
10. 教材(資料・テキストなど)は適 切でしたか	59.9	<u>74.5</u>	56.6
11. この授業に対する総合評価を5 点法で回答してください(「5点」+ 「4点」(%))	89.7	81.2	<u>91.6</u>

2. 「スポーツスタディ」の評価（自由記述）について

(1) 全体的傾向

スポーツスタディが2単位に値するかどうかについて自由回答をしてもらい、「値する」と「値しない」にカテゴリ化したところ図1に示すように全体の95%が「値する」と回答

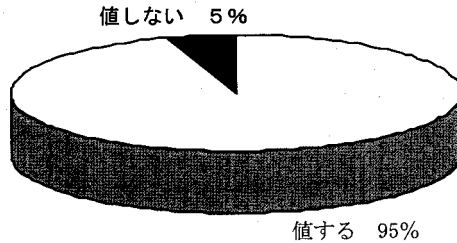


図1. スポーツスタディは2単位に値するか
(N=194) (%)

(2) その理由について

i) 「値する」の主な理由

- ・実技ばかりでなく講義が入っていることで知的理解と技術の向上、実践的態度形成に貢献していること、実技試験のみならずレポートを課していることで2単位に値すると回答しているものが多い

事例1: 「値すると思う。ただやみくもにやるだけでなく、根本的なところからスポーツを始められるので意味がある。講義をはさむことで効果とかもわかる。それでやる意味がわかった上で実践する。しかもしめにレポートを書いて完結させているので2単位に値する。」

事例2: 「2単位に値すると思う。それは、1つの授業で知的理解と身体的・技術的な向上ができる場であるから」

事例3: 「スポーツを行うだけでなく考えるという行動をし、レポートにまとめたりするのだから他の授業と同じように2単位あって当然だと思う。また、スポーツは1単位であるという考え方がそもそも間違っていると思う。」

事例4: 「当然値するものと思われる。まずこのスポーツ観(ニュースポーツ)を理解するためには実技と共に講義も必要とされるし、さらに理解を深めるにはレポート作成も必要である。自分はスポーツ観は人間にとってスポーツがどのように作用するかを深く説明できるものと

思っているのではや1つの学問と何ら変わりはないので2単位は
当たり前と思っている」

ii) 「値しない」の主な理由

- ・実技と講義の時間の少なさ、講義内容が量的に少ないことをあげるものが多い

事例1 : 「1.5ぐらい。生理面の解説をもう少し、ただ筋発達についてわかった
ので非常に役立った」

事例2 : 「2単位科目にしては、楽だと思う。もう少しトレーニングについての
知識なり方法論などについて学んでもいいと思う。」